外郎派地下鞠の蹴鞠技術「一足三段」について
―外郎右近政光著『中撰実又記』から―

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-08-04
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00063654

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

外郎派地下鞠の蹴鞠技術「一足三段」について
―外郎右近政光著『中撰実又記』から―

村戸弥生

はじめに―本稿の目的

『中撰実又記』（以下『実又記』と略称）上下二巻は外郎右近政光著、正保三年（一六四六）橋本源左衛門（不明）宛の奥書を持つ地下の蹴鞠口伝書である。この書の概要等については本稿末尾に掲げた「『中撰実又記』関連の旧稿」①～⑤に既述した。江戸時代の地下鞠の実態についてはあまり知られていなかったが、このたび『実又記』大津平野神社蔵難波家旧蔵本の全文翻刻と現代語訳を報告する機会を得た（旧稿⑤）。その全体像を明らかにするためには、さらなる読み込みと検討が必要である。

本稿は旧稿①に引き続くもので蹴鞠技術の考究である。古くからの蹴鞠は「公家鞠」と呼ばれ[注1]、蹴鞠の家として、難波・飛鳥井・御子左といった公家の三家や地下の賀茂家があった。ところが、江戸時代初期に政光の完成させた蹴鞠は画期的なもので、家元制度のもと流派としての公認はありえなかったものの、江戸時代を通して影響を与えた。今これを「外郎派地下鞠」と称しておく。

江戸時代中期の寛保二年（一七四二）奥書、伝・喜多川元数著『地下流蹴鞠秘伝書』「蹴鞠右近地下風之事」では、次のように述べる。

地下風といふ事は、右近より初り、御家風といふは、請もなし、留もなし、唯鞠丈壱丈五尺（約四・五メートル―村戸注）斗に、すらり〳〵と蹴る也。尤、沓下離るゝ事なし。地下風には請け、留といふ事をはじめ、外より来る鞠を和らぎに請け、さて我が鞠に蹴直すなり。

ここには「地下風」（外郎派地下鞠）と「御家風」（堂上鞠）との蹴鞠の違いについて明確に述べられており、外郎派地下鞠を特徴付けるのは「請け、留といふ事」であるとする。これは、後述する「一足三段」と呼ばれる技術なのであるが、これこそが政光が完成させた外郎家独自技術であった。本稿は『実又記』の記事を起点とし、それ以前の蹴鞠書にある記事を追うことで「一足三段」とはどういう技術で、どういうところから形成されてきたものなのか、それは蹴鞠技術史上どのように位置づけられるのかを究明していきたい。

1　政光が完成させた蹴鞠技術――「一足三段」

『実又記』下巻12条（以下（下12）のように示す）「打緒の秘伝」冒頭部分にある次の記事は、政光が完成させた蹴鞠技術を端的に伝えている。（鍵括弧、傍線等は村戸による。以下同じ）

打緒と云事、古は稀の秘曲にて、「人及ぶべきにあらず」と、『古今中撰』第一の詞也。予が先代、今の兄弟迄も、足低に沓下を全て用いんと、身遠く蹴し也。然る故、世間一同に其の蹴方なるを、我が代に至て、身近く、請、高足、留の三段にもと付し故、今の世、又みまねて、三段に蹴なせしは、予も浅からず満足の心也。我家に云るは、拍子の一足三段は序破急也。蹴様の一足三段を、請、高足、留とせし也。此外に打緒は別曲とす。地下一流の鞠曲の司也。…

傍線部にあるように「先代」や「兄弟」、すなわち政光の父・教林も、家督を継いでいた亡き長兄も、〈足取りを低くして沓裏全面を地に擦るようにと、身体から遠いところで鞠を蹴〉っていた。それを政光は、〈身体に近いところで、「請け・高足（こうそく）・留め」の三段にもなるように〉と引き付けて蹴〉ったのである。これを外郎家では、「蹴様の一足三段」と言った。政光はこの「蹴様の一足三段」（以下「一足三段」と略称）を完成させたのである。

ここに出る技術名について一言しておく。「打緒」とは降りてきた鞠を上半身から足元へと摺り下ろす技である。「請け」とは、「高足」の技をする前に鞠を整えて上げやすくするために出す足技である。「高足」は後述の仮名草子『竹斎』での振仮名から判断して「こうそく」と読む。鞠をたいへん高く蹴り上げる足技である。「留め」とは、「高足」で降りてきた鞠を、蹴るでもなく蹴らないのでもない足遣いで「留める」足技である。この「請け・高足・留め」の「一足三段」は、「高足」を成就させるための一連の足技である。

一連のものであることについては、『実又記』各所に言及がある。（下9）「請足の習」には、次のようにある。

我家に古来より、定め置ける一足三段、皆請より発れり。『古今中撰』に云、「留は寄りに有、寄りは高足に有、高足は請に有」と教しは、誠に有難き金言也。…

「一足三段」は外郎家古来の技術で「請け」から起こったものである。ここで引用される『古今中撰記（注2）』の記述によると、その成就には「寄り」（鞠へのアプローチ）も関連し、「請け・高足・「寄り」・留め」というふうに一連化される。

また、（下12）「打緒の秘伝」には、次のようにある。

「高足は請に有、打緒は高足の善悪に有、打緒の善悪にて留、又異なり」と、「古今の詞」を能覚ゆべし。云心は、請時、上様を失念すべからず。能上りし時、打緒に入事を思ふ、打緒入時、留足に能々知らすべき也。請、高足、留足、一足〳〵を失念せずして、三段に分、是を以て、家伝一足三段と云事明らか也。此三段に寄と打緒を云はざるは、寄、打緒は身分、足の役に有らざる故也。…

ここで引用される「古今の詞」によると、「一足三段」に「打緒」

を組み込んでいる。（下11）「寄の身足」によると、「寄は身足を離れず、高足より、打緒、留に引導する物也」とあるので、「請け・高足・「寄り」・打緒」・留め」というふうに一連化される。但し「寄り」「打緒」は身体動作での技であって足技ではないので、「一足三段」には含めない。

「一足三段」の間に「寄り」と「打緒」を組み込み一連化したのは、「高足」とともに「打緒」といった「地下一流の鞠曲の司」ともいうべき技を際立たせるための工夫でもあっただろう。『実又記』下巻のこのあたりの構成は、（下9）「請足の習」に始まって、（下10）「高足の習秘」、（下11）「寄の身足」、（下12）「打緒の秘伝」、（下13）「留足秘伝」と続き体系化がなされ、その記述は具体的技法を中心に詳細を極めている。「打緒」に関することについては本稿では扱わず機を改めて考究したいが、政光は「一足三段」を核として技を一連化することを、外郎家伝来の口伝である『古今中撰記』や「古今の詞」を参考に学んだことが知られる。

では、「一足三段」の足遣い自体はどのようなものであったのか。冒頭の引用文傍線部で見たように、政光は父・教林の「足低に沓下を全て用いんと、身遠く蹴」るやり方を否定している。正反対の物言いで示すと、〈足取りを高くして沓裏をあまり擦らないようにして、身体から近いところで鞠を蹴〉ることになる。政光が「高足」の技の時にこの蹴り方を実践したことは、以下の（下10）「高足の習秘」から知られる。【訳】とともに示す。

高足に沓下有るは悪敷也。足高にけるにより、沓下無し。足低は損多し。上の高下、心に叶はず、身近く上る故、上にゆふなし。ゆふなきにより、身堅くして、寄りあし。寄りあしければ留まらず、皆上、身分にけかぶるにより、打緒の味悪敷。足高にして左右能つり合、柔にふらりと出たる高足は、静に上り、静におるゝ也。高足を向へくらせてと思ふ時は、尚足高にして鞠の前方をける也。足高にと云時、心得悪敷ければ、ひざかゞまざれば、足高には出し難し。…

【訳】「高足」の技をするときに沓裏を地に擦りつけることがあってはよくない。足高にして鞠を蹴ることにより、沓裏を擦ることは避けられる。足取りが低いのは失敗が多い。蹴り上げる鞠の高低が思いのままにならず、身体に近く上がるために上半身に余裕がない。余裕がないことで身体が硬くなって、鞠への「寄り」がうまくいかない。「寄り」がうまくいかないと鞠を「留め」られず皆上がってしまい、身体に対し鞠を蹴りかぶるために、「打緒」の技の切れ味が悪くなる。足高にして、左右の体勢をうまく釣り合わせ、柔らかにふらりと蹴り出した「高足」は、鞠が静かに上り静かに下りるのである。「高足」の技で下りてきた鞠を自分のところで迎えて高く蹴り上げてやろうと思う時は、さらに足高にして鞠の前方を蹴る。〝足高に〟と言う時、正しくない理解で蹴ると膝が屈まらないので足高には蹴り出せない。（鍵括弧は技術名）

このように政光は、〈足高に蹴る〉〈沓裏を地に擦りつけない〉、さらには〈膝を曲げる〉ことを言うのである。

「高足」の成就にあたって政光は父・教林とは正反対の蹴り方を積極的に行っている。だが、〈足高〉に蹴ることは古来戒められるとこ

ろのものであった。政光の蹴鞠の足遣いに対する価値観の転換こそが、「一足三段」の完成に至る鍵となろう。その価値観の転換はどのようにして起こったのか。まずは、江戸時代初期の鞠の蹴り方に対する価値観について確認しておきたい。

2　江戸時代初期の鞠の蹴り方に対する価値観

（1）〈足低〉に蹴ること

かつて公家鞠では鞠を落とすことよりも、優雅な身のこなしに価値があった。まず、公家鞠の最後の到達点とされる難波家鞠書『宗清百問答』[注3]の記事をみてみる。この書は、康永三年（一三四四）、難波宗清奥書の書で、蹴鞠の技術や練習法について二条良基と宗清との問答形式で書かれている。各項目を通し番号一～一〇〇で示す。

この書にある良基の問いには、「足の高く候鞠をば、何として直し候べきやらん」（四九）とある。ここから〈足高〉は当然直すべきものであったことがわかる。また、木の本で遠くに落ちる鞠の対処法の問いに対する宗清の答えには、「おちつき候はぬ前に蹴候へば、足高くあがり候て、見苦しく候」（七七）とある。〈足高〉は見苦しい足遣いだった。

〈沓裏を擦る〉事については、江戸時代に使用されていた鴨沓はこの頃、まだ使われていないので比較できないが、〈膝を曲げる〉事については、「膝の屈みて候鞠は、生得の事にて直り候はぬやらん。いかにして直し候べきやらん」（四八）とある。また、鞠が膝に当たった時の対処法の問いに対する答えには、「膝をもちあげ候て、受け候は、下品の事にて候。…足を上候事は、わろき事にて候」（八四）とあり、膝を使うことは「下品の事」とする。なお、この前条で宗清は「賀茂の者ども」の「躍り上が」る蹴り方を「下衆しき」と評している（八三）。

そして〈足低〉が勧められる。蹴る時の足遣いの問いに対する答えには、「いかほども落とし付て、蹴候也。足ひきく候てわろき事は候まじくて候」（六）とある。

この価値観は江戸時代の堂上鞠でも変わらない。以下に『蹴鞠百五十箇條』（以下『百五十箇条』と略称）を参照する。この書は、作者不詳であるが、戦国期あるいは江戸初期の飛鳥井流のものかとされる。[注5]後述するが、この書に「高足」の語が出るところから、一応、元和～寛永頃の著作と推測しておく。各項目の通し番号は一～一五〇で示し、『続群書類従』からの引用頁を記しておく。

この書では、「足遣ひの事、いかにも低くて失なかるべし。鞠の失は只、足の高きより起これり」（四九、六五頁）とある。〈足高〉を戒め、〈足低〉を勧めるのである。〈沓裏を擦る〉事については、「足の出し様の事、土踏まずを擦りて、掬ひ上ぐるやうにあるべし」（五〇、六五頁）とある。「土踏まずを擦」るところから、沓裏全体を地に擦りつけているのであろう。[注6]

また、〈膝を曲げる〉事については、「鞠の蹴様の事、…膝を反らして、踵より足を踏み、よく鞠を見下ろして蹴べし」（四三、六三頁）とあり、膝を真っすぐに伸ばすことを勧める。そして、「身なりの事、先癖なきをよきとす。…のけばりて、足高く膝屈まり、癖出来也」（四四、六三

頁）とあり、足高で膝が屈まるのは姿態に「癖」が付くもとになるとする。また、「鞠を膝にて留むる事あり。其時膝を持ち上げて当つべからず。腰を据へて浮くべし。されど下品の事なり」（一三九、七六頁）ともあり、「鞠を膝にて留むる」場合であっても「膝を持ち上げ」ることに関して否定的で、膝を使うこと自体「下品の事」と考えているようである。

〈足高〉に蹴っていたのは地下である賀茂家である。享禄四年（一五三一）奥書の賀茂流鞠書『松下十巻抄』と、寛永八年（一六三一）、松下教久奥書の『蹴鞠之目録九拾九箇條』[注7]（以下『九拾九箇条』と略称）で確認してみる。両書とも各巻各項目に私に通し番号を付け、『続群書類従』からの引用頁を記しておく。

『松下十巻抄』には、以下のようにある。（破線部については後述）

いかに鞠にあたり、おきつころびつ仕候て、知らぬ者の目には見事と申候へども、かたきのわろき鞠は鞠にて有まじく候。いかに足高く、知らぬ者の目にはわろく立候とも、かたきのよき鞠は鞠たるべく候。第一、かたきを本にすべし。…（三3、一五三頁）

傍線部から賀茂家では、〈足高〉は「わろく」見られることを知っていたが、「かたき」がよければ足高でもよい蹴鞠になるのだとする。「かたき」は「形木」であろう。[注8]

また賀茂家では、沓裏を地に擦りつけないことも言う。『九十九箇条』では、

・沓を真砂にさらり〳〵と音の高く引擦る事あしき也。只足をかろく、沓下をきびすより踏み落してよし。（十5、一三二頁）

・高くをばかろく、ひき、はおもくといへる事、鞠たけ高く候はゞ、さのみ沓下あらくふまぬ事也。爪先をたて、待べし。（九24、一三〇頁）

とある。だが、賀茂家でも「蹴足高かるべからず。沓下の拍子を本に心がけぬれば、おのづから足のひきくなる也」（十2、一三二頁）とあるのは、伝統的な蹴り方の価値観の元にあることを示すようである。

そもそも〈足低〉〈沓裏を擦る〉ことと、〈足高〉〈沓裏を擦らない〉〈膝を使う〉こととは軌を一にするものであろう。前者は公家鞠から引き続く堂上鞠の価値観であり、地下の賀茂家はその価値観の元にありながらも後者の蹴り方で蹴っている。そのあり方は政光の同時代まで継承されてきたと考えられる。父・教林は伝統的な蹴り方の価値観にのっとって〈足低〉に蹴っていたのに対し、政光はその価値観に反し賀茂家の蹴り方に近く、むしろ、賀茂家の価値観を超えて積極的に〈足高〉を勧めていたのである。

（2）〈身遠く〉蹴ること

ここで父・教林の〈身遠く〉蹴っていたことについても確認する。〈身遠く〉蹴ることも伝統的価値観による蹴り方であると言えよう。これは「遠くに落ちる鞠を追いかけて、左の膝を地面に突き、右足を前に出して、地上すれすれで鞠を上げる技」[注9]である「延足」の蹴り方である。「延足」は「帰足」「身に沿う鞠」と合わせて「三曲」と呼ばれ、その中でも「延足」は上膎鞠、ひいては公家鞠を特徴づけ

る足遣いであった。[注10]

単純に項目数の多寡から言っても、『宗清百問答』には、「延足」の項目は五二から六〇の九箇条にわたり、四箇条（六一～六四）の「帰足」、三箇条（六五～六七）の「身に沿う鞠」に比しても多い。飛鳥井流とされる『百五十箇条』でも、「延足」に関する項目は八箇条（九二～九八、一〇一）と数多く、関心が高いことが知られる。[注11]

一方、賀茂家の『松下十巻抄』では、「三曲の事」に「延べ」の名称が出るのみで（五14、一六一頁）、「延足は、左を敷、いかにも遠きを延ぶる也」（五31、一六二頁）と記事は少ない。

『九十九箇条』になると、「延足」に関する記述は見られず、さらに、

大略の人は大股げにして、及び腰に足を差し出して、のけ反りて蹴るにより、鞠身に遠くして数蹴られず。見苦しき也。所詮鞠に付き寄り、其所に足をたて、爪先の当る所、膝に力を入て、爪先より上ぐれば、鞠身に沿ふ也。鞠退きさらば、ひつ付て足を上ぐる事肝心也。…（六12、一〇九頁）

とあり、不十分な「延足」をすることで鞠が「身に遠く」なり、蹴り続かないことを「見苦し」と批判的に言っている。鞠に付き寄り、膝を使って「身に沿う鞠」にすることを勧めるのである。

ここには〈身遠く〉蹴る延足系技術から〈身近く〉蹴る身に沿う鞠系技術への価値的転換が見られる。この転換の理由には鴨沓の使用といった用具の変化や、鞠垣の普及といった場の変化など様々の要因があり簡単には言えないが、技術的には『宗清百問答』の「延足」の記事に、「倒れる」という語が多く出ることに気が付く（五二、五三、五五、五六、五八、五九）。例を良基の問いより挙げる。

・延足をば何としてか、蹴ならひ候べきやらん。まづ足にあたり候はずとも、つねにたふれならひ候べきやらん。（五二）

・延足はたうれたるがあながち本にては候はぬやらん。大方いかほど延べたるがよく候やらん。（五三）

スライディングする「延足」は「倒れる」蹴り方であり一足で終わりがちで、後が続かないのである。先掲『松下十巻抄』破線部で示したが、「いかに鞠にあたり、おきつころびつ仕候て、知らぬ者の目には見事と申候へども、…」といささか批判的にあったのは「延足」の蹴る様のことであろう。

そして『実又記』（下22）「延べの足」に至ると、四間四方の狭い鞠場で行う地下鞠では不相応の技とされ、嗜みとして覚えておくべきだが一足で終わる技だとして他の項目より記述量が著しく少なく、扱いが非常に軽いのである。

地下はもともと公家のフォロー役として鞠を落とさないことが役どころだった。賀茂家では「下衆しき」蹴鞠と言われながらも、〈足高〉で〈身近く〉蹴っていたのもそのせいだろう。同じ地下でありながら父・教林は〈足低〉で〈身遠く〉蹴る伝統的な価値観での蹴り方をしていた。父・教林の〈身遠く〉蹴っていたことに関しては本稿では扱わず、「打緒」のことも絡めて機を改めて考究したいが、ともかく政光は父・教林と正反対の足遣いを是とした。「高足」の技が一足で終わり、後が続かないことを嫌ったのである。「高足」で上げた鞠を落とさず、しかも〈足高〉であっても「下衆しき」と言われない蹴り方を模索した結果が「一足三段」だったのではないか。

「一足三段」を確立するまでには、まずは、「高足」ということの

技としての認識化があり、〈足高〉に蹴る足遣いに対する肯定化があらねばならない。その次に〈足高〉であっても「下衆しき」と言われない、しかも落とさず続けられる蹴鞠技術を追求することになる。以下「一足三段」の形成過程を追う。

3 「一足三段」の形成

（1）「高足」の出現

公家鞠の時代から「高く上げる鞠」はある。十二世紀末頃成立と思われる『成通卿口伝日記』（『群書類従』所収）には、蹴鞠の天才として神格化される藤原成通が鞠を蹴り空に消えて帰ってこなかったという逸話がある。それに基くようで、正応四年（一二九一）前後に成立した飛鳥井雅有著『内外三時抄』[注12]では「雲入」と呼ばれる技があり、「是何の用にもたゝぬ事なれど、昔より雲に入とて人々あらそひける事なれば、今も遊び事にして持べし」とある。高い鞠を上げるのは「何の用にもたゝぬ事」という意識があった。

「雲入」は『百五十箇条』にも出る。「雲入りの足とて、大きなる鞠丈を蹴る事、暮にあり。ただし、無益の足なれば蹴まじきなり。暮に一足のものなり」（一一三、七三頁）と、「無益の足」とする。鞠を高く上げることについては『松下十巻抄』「鞠長の事」にも、「一丈五尺なり。それより高く蹴る事詮なし」（一6、一四五頁）、『九十九箇条』でも「一丈五尺也。これより高く蹴るべからず」（三1、九一頁）とする。

『実又記』（下10）「高足の習秘」では、三家の技であるとして「雲井」の名で言及がある。「雲井と云は、請も無く、只一つ力の及たけに、高足に蹴上、留めずして、何方へ落る共、其鞠を取」るような、いわば儀式化した技になっている。

「高足」が技術名として見えるのは、富山道治著の仮名草子『竹斎』である。

又或人を見てあれば、鞠は高足よきぞとて、思ふさまに蹴上ぐれば、脛は首にうち懸り、外しかねてぞ見えにける。…

古活字本『竹斎』が刊行される元和末年頃（一六二一～二三）には「高足」が技術名として認知されており、自分勝手なやり方で試みて失敗し、見苦しく終わるものであったようだ。寛永整版本には挿絵もあり、「高足」を失敗し、尻餅をついている若侍が描かれる。これとても一足で終わっている。

「高足」の技術名は『百五十箇条』にも出る。

左足の事、よく踏みちがへ、〳〵して立たるがよし。踏み替へずしておけば、立足とて、高足が蹴られぬものなり。…（五一、六五頁）

『百五十箇条』では、「高足」を蹴るには「足踏」を絶えず踏んでいることが必須とされる。先に見たように『百五十箇条』では沓裏を擦る事を勧めるが、「沓をあまりに引きずる事わろし。足踏みしてあゆみたるよし」（二一、六〇頁）ともいうのは、「高足」を意識したものだろうか。ただ、ここでは外郎家のように〈足高に蹴る〉ということは言われない。堂上鞠では「足踏」で対応しようとするようである。

「高足」は「雲入」とは違う。「雲入」はあくまで一足で終わるが、「高足」は鞠を高めに蹴上ることの延長上にある技であり、落としてはいけないものである。ゲームの流れの中で出る「高く上げる鞠」なのである。それはどんな場合に出現するのであろうか。

『九拾九箇条』「序破急三段の事」の次の記事にも、「高足」という語が出る。（後述する際の参照箇所にも傍線を施しておく）

序の鞠の時は、いかにも進退をたしなみ、鞠を高足に蹴上、請声は「あり」の「利」の字をはり、長く引、「あ」の字をば口の中にてけして請てける也。切れ行鞠をしたひ蹴べからず。たゞ直ぐなる鞠ばかりを蹴ちがへぬやうに心にかくべし。分足をたがへず蹴る也。是一段也。

破の時に木にも軒にも鞠を蹴かけ、聊荒く蹴なし、切る鞠を追延、姿悪共、鞠を落さじと馳走して曲をつくし、男足女足には鞠の色（鞠の回転のこと―村戸注）面白く、声をそふといへり。互に人を見じと心を懸、油断有べからず、是二段也。

急の時は、鞠を低くつめて、分足をひかへ、二足にて他分にわたし、一足をひかへ、一足にてゆづり、八人おなじ心に有之、数を上みちて、興ありて鞠を納べし。…（六20（1）、一一一頁）。

「序破急」とは、一日の鞠会での進行次第を三つに分けたときの、それぞれの段階のことをいい、「三段」ともいう。[注13]「高足」は、「序破急」の序に出現する。以下、他の蹴鞠書の「序破急」の記事からそれを確認する。便宜上、「序破急」の切れ目に「／」を入れておく。

公家鞠の時代から鞠を高く上げることは序で行われていた。『宗清百問答』の「序破急」についての問いに対する答えには、以下のようにある。

序と申は、鞠たけ高く、静かに蹴はなち候て、ふかく立入候べく候。／破と申は、鞠を木にかけおもしろく蹴候也。／急と申は、数をあげ、鞠丈を木にもかけず、たしかに人のもとへ、渡し候也。…（一〇〇）

『百五十箇条』「序破急三段之事」でも、やはり序に鞠を高く上げていた。

鞠を蹴るに序破急とて、三ツの心づかひあるべし。鞠始まる時は、木の本を立出ず、分にしたがひ、鞠を高くゆふ〳〵と蹴べし。心には油断あるべからず。これを序分といふなり。／半ばには、小さき鞠と大なる鞠と交ぜて、三足ばかりつづけべし。これ破分のときなり。／晩気に及び、暮も惜しきときは、木の本を立出でゝ、鞠の丈を低く蹴て、数を持ちて足踏をしげくして、木に鞠の当たらぬやうに蹴べし。これ急分なり。序破急三段の心遣ひといふ、此事なり。（五四、六六頁）

『松下十巻抄』「三段の事」では、

序破急の三段有べし。鞠始まる時は序分也。鞠長の鞠をけて、のびらかにのどやかにけ付すべし。／破分は中ほどの蹴様なり。鞠長に甲乙あひまぜて、高きと低きを同じほどに蹴て、時々曲をも蹴るなり。／急は晩景の蹴様なり。ひきゝを蹴て、鞠たけの鞠を少々蹴る也。曲をも蹴、数をもはげみ、忠をつくし興をもよふし、いかにもにぎやかに蹴なすべし。（一5、一四五頁）

とある。

いずれの場合も序で、高い鞠を上げていた。よって『九十九箇条』

の記事からも、序で行われていた高い鞠の蹴り上げが、「高足」の、技としての認識化へと展開していったと考えてよい。[注14]

ところで鞠を高く上げることは、序以外にも、破でも出現している。『九十九箇条』では傍線部のように、破において「男足女足」に蹴ることが言われている。それは、「小さき鞠と大なる鞠とを交ぜて、三足ばかりつづけ」（『百五十箇条』傍線部）て蹴ることや、「鞠長に甲乙あひまぜて、高きと低きを同じほどに蹴」（『松下十巻抄』傍線部）ることも同じであって、破では、〈低い鞠・高い鞠・低い鞠〉といった具合に、失敗しにくく、しかもメリハリがつくような蹴り方で鞠を上げている。後述するが、これを「一段三足」という。

（2）「高足」の対処法―「一段三足」と「一足三段」

高く上がって落ちてくる鞠の処理にはしかるべき技術がいるであろう。先掲『九十九箇条』によると、破では、木や軒に「鞠を蹴かけ」たり、「曲をつくし」たりして見せ場を作るようだが、序では「直ぐなる鞠ばかり」を「分足をたがへず蹴る」事が勧められる。「分足」とは「三足蹴て渡すを云也」（三3、九一頁）とあり、すなわち序でも「一段三足」で蹴るのである。

「一段三足」は高く上がって落ちてくる鞠の処理のためにもあった。『宗清百問答』の問答には、以下のようにある。

一、おびたゝしく高く候鞠をば、何と蹴候やらん。

かならず高き時は、次のたびは、低くて受け取候也。Ⓐ人のもとより受け取候時、低くて一足、Ⓒ人のもとへやる時、又、低くて一足、この三足をもて一段と申候なり。（九二）

「一段三足」とは、「受ける鞠・手分の鞠・渡す鞠」の三足を一段とすることである。[注15] 引用文中傍線部は、Ⓐ「受ける鞠」、Ⓑ「手分の鞠」、Ⓒ「渡す鞠」に該当する。「一段三足」については、『蹴鞠口伝集』（上28「足の数の事」）、『革匊要略集』（行儀「身躰事」）、『内外三時抄』（「鞠長数鞠」）といった一二世紀から一三世紀の口伝書[注16]にも記事があり、公家鞠の頃から言われてきた概念だった。

「一段三足」については、『百五十箇条』にも、

鞠を蹴るとき、三足つゞける覚期をもつべし。謂は一段三足として、受取鞠壹足、手分の鞠一足、人の方へ渡す鞠一足なればなり。蹴られずともその心得もつべし。足遣ひにも心持あるべし。Ⓐ受取鞠は柔らかにしのぶべし。Ⓑ手分の鞠は鋭に強くあるべし。Ⓒ渡す鞠は足をひかへて弱らすべし。（五三、六六頁）

とある。

賀茂家においても、「一段三足」の考え方である。[注17]『松下十巻抄』に、「三足づゝけて人にわたさむ事也。これ一段也」（一4、一四五頁）とあり、また、

鞠請取候てけ候鞠は、Ⓐ我がまへゝ来るやうに仕候て、Ⓑ分のまりいかにも色よくけまはして有やうに蹴上、又、Ⓒはなつ鞠をば外にまいるやうにけあぐべし。但心にまかすべからざるか。されば分足三足とは、請取候て一足、分のまり一足、けはなつまり一足、以上三足なり。…（三12、一五四頁）

とある。『九拾九箇条』でも「一段三足のこと、まり数一段三足づゝ也。請とり一足、自分に一足、人にわたす一足、是也」（八35、一二一頁）

とある。

つまり、堂上も地下も他家では「一段三足」の発想のもとにあった。では「一段三足」と外郎家独自の蹴り方の概念「一足三段」とは何が違うのか。

『九十九箇条』では「高足」は序で出現していたが、『実又記』では、「高足」は破で行う（下9「請足の習」）。「一段三足」の破の〈低い鞠・高い鞠・低い鞠〉の三足の組み合わせに「一足三段」を当てはめると、一足目の〈低い鞠〉は「請け」、二足目の〈高い鞠〉は「高足」、三足目の〈低い鞠〉は「留め」ということになる。「一足三段」の形成は、「一段三足」の概念を基礎にして、そこからなされたと考えられる。

それでは、「一段三足」と「一足三段」は同じなのか。それについて、『実又記』には外郎派地下鞠と堂上鞠の違いに関する言及がある。

家の渡は長高し。是、請、高足、留を、地下風に有ざる故か。小き渡は、鞠長を直て蹴るを嫌給ふ故か。三家の伝を知らず。（下18「渡し鞠の足」）

堂上鞠は「請け、高足、留め」を「地下風」にはしない。それは、「鞠長を直て蹴るを嫌給ふ」つまり、鞠の高さを調整して蹴り直すことをしないのである。「高足」をすることはあっても、「請け」「留め」をしないのである。堂上鞠では「三拍子」（右・左・右といった蹴鞠のフットワークのリズムを表す言葉）[注18]と呼ばれる「足踏」で、他者との鞠の受け渡しに主眼を置きながら「高足」に対応するのである。

それに対し、『実又記』（下9）「請足の習」によると、そこでいう「請け」とは、「高足の前足」であって、「序より破にかかる足」であるとする。当時世間で「蹴請け」と言われている足遣いがあったが、それに関して政光は「蹴ると請けとは、心大いに違ふ」として否定する。「請け」はあくまで「請け」る足遣いなのである。

また、「留め」については、『実又記』（下14）「留足秘伝」によると、「蹴るに有らず、蹴ぬに有らずの足遣」という。鞠の落ちてくる来方は多様だがそれぞれに対応した留め方があり、具体的記述がなされる。当時世間で「蹴留め」と言われている足遣いがあったが、それに関しても政光は「留足は蹴足の中に、只一つ有足也。蹴る足は初中終也。蹴る足を留とは如何して云也」と否定する。「留め」はあくまで「留め」る足遣いなのである。

「請け」も「留め」も他に紛れようもない、そのためだけの足遣いである。「高足」を一足だけで終わらせることなく落とさず連続させるために、「高足」の前後に「請け」「留め」といった調整用の足遣いを「一段三足」を参考にしつつ挿入した。それで「一足三段」ができた。いわば「一足三段」は「一段三足」の「手分の鞠」の部分だけを特立させて、それを三段に分けて「請・高足・留め」としたものである。

それでは「一段三足」の他の部分「受ける鞠」と「渡す鞠」とに該当するのは何か。『実又記』には（下19）「渡し鞠を請取足」と（下18）「渡し鞠の足」といった項目があり、それらがそれぞれに該当する。外郎派地下鞠では「渡し鞠を請け取る足・一足三段（請・高足・留め）・渡し鞠の足」になるのである。この体系の違いを表にすると次のようになる。

一段三足	受ける鞠	手分の鞠	渡す鞠
一足三段	（渡し鞠を請け取る足）	請け・高足・留め	（渡し鞠の足）

（3）〈足高〉の肯定化― 落とさず続けること

「一段三足」の「受ける鞠」と「一足三段」の「渡し鞠を請け取る足」はどのような違いがあるのか。「受ける鞠」については、先掲引用文の傍線部Ⓐである。それによると「低い鞠」（『宗清百問答』）を「柔らかに」（『百五十箇条』）、「自分の前に来るように」（『松下十巻抄』）上げることのようである。これについては今はうまく説明できない。

『実又記』（下19）「渡し鞠を請取足」を見ると「渡し鞠を請け取る足」とは、「こなす足」のことをいう。「此こなすと云は、蹴るに有らず、請足に有らず、鞠を足にてかゝへたる心也」という。また「こなす足は取込て、足ひくにして、あたる所にて身をかため、蹴はなす心の足成べし」（下9「請足の習」）ともいっている。〈足低〉で鞠を足で抱えるようにするようである。

そして、「渡し口、習の如く蹴切らず、むくりと渡りしを、沓下強く張懸、蹴切事、悪敷蹴様也」とあり、渡し鞠を請け取るときに「蹴切り」といった足遣いになるのを大変に嫌う。〈足低〉で「沓裏を強く地に擦って、足をぴんと伸ばして」蹴るのは、堂上鞠が是とした先述の「延足」の蹴り方である。『実又記』ではこの足遣いを「蹴切り」と言って非難する。この足遣いでは後が続かないのである。当時の「田舎鞠の身遠く、只蹴る斗と覚し人」は「蹴切り」になりやすいらしく、それによって鞠を「落とす」ことを政光は強い調子で非難する。「蹴切り」にしないためには「高き渡も、低も、此足（こなす足―村戸注）にて一つか、へて、二つめを請に直し、高足す」ることを勧めるのである。

また、相手からの渡してきた鞠が、脇に行ったのを受ける場合、「腰を能直、腿を離し、足高に身を左の足に持せ、足の甲に懸て、か、へおろす也」とする。これは〈足高、沓裏を擦らない、膝を用いる〉蹴り方に当てはまる。政光にとって基本的な足遣いは〈足高〉らしいのである。

「一段三足」の「渡す鞠」と「一足三段」の「渡し鞠の足」の違いについても見てみる。「渡す鞠」については傍線部Ⓒである。それによると「低い鞠」（『宗清百問答』）で「足をひかえて鞠を弱らせて」（『百五十箇条』）蹴るのが堂上鞠、「外へ行く程に蹴りはなつ」（『松下十巻抄』）のが地下の賀茂流である。これについても今はうまく説明できない。

『実又記』（下18）「渡し鞠の足」を見ると、「渡し足は、足高にして、足の指そらず軽く出也」とあり、〈足高〉を基本とする。そしてここでもまた「足に力を強くして、蹴入る」蹴り方である「蹴切り」を強く批判する。「蹴切と云足は、沓下、地を離れず、然も指そりて、膝より下、つゝ立ち、指先に力入て、色強し」といった足遣いで、鞠の回転が早いため次の人が受け取りにくいのである。ここでも政光が勧めるのは〈足高、沓裏を擦らない、膝を用いる〉蹴り方なのである。

この蹴り方は『実又記』の総論にあたる項目でも一般的に言っている。

・左の足をぢり〳〵とつまさきがちにふみ出し、右の足は指のそらざる様にきびすを張、ひざのふしを折込、鞠に足を付上る様

に足にけるがよし。次第に足はひきく成故也。…（下5「初心を取立る伝法」）

・能沓下と云は、羽箒などにてはくがごとし。…足の裏一ぱいにはすらず、きびすの方する也。…態、沓の裏一ぱい強すり付るを、強き沓下など、ほむる事、おかしき沙汰也。…足ひくきは甲に懸りて（沓音が―村戸注）悪敷、…石打より甲に懸り、足高成は、沓音能物也。…（下6「沓下付沓音」）

・足取高く、沓下に音無し。足ひきく、沓下強とて摺付、ずんと蹴出せば、色強、鞠の高下も沙汰がならぬ故、相手請取難し。蹴損じのもと也。…（下7「上鞠の習」）

政光にとっては〈足高〉が基本の蹴り方である。〈足低〉では鞠の回転が強くコントロールしにくいのである。〈足高〉には技術的に次のような効果があった。

『九十九箇条』には、「数鞠の事、…足をば少高くすべし。鞠弱くせん為也」（八38、一二二頁）とある。「数鞠」とは鞠を多く上げ続けるプレーのことをいう。[注19]〈足高〉にすると鞠が緩くなりコントロールしやすく、「数鞠」の時には落としにくくなる。〈足高〉を戒める『百五十箇条』でも「数鞠の蹴様は、つねよりも足を高く上げて、数を本に蹴べし」（一二六、七五頁）とあり、「数鞠」には賀茂家同様、少し〈足高〉にすることを勧めている。また「鞠に弱くと当たるときは、わざと膝を屈むることあり」（四三、六三頁）ともあり、鞠のコントロールのために〈膝を曲げる〉ことも許容するのである。

「数鞠」は「序破急」の盛り上がりである急の段階で行われる（前掲引用文傍線部参照のこと）。鞠を落とさず続ける急での「数鞠」のために、〈足高〉は堂上鞠でも許容されるものだった。〈足高〉肯定化への素地は「数鞠」にあったのである。

おわりに

蹴鞠が大衆化し地下鞠が主流となると、優雅な姿態よりも鞠を落とさないことが一番の価値となる。政光は蹴鞠が一足で終わる事を強く否定した。それが〈足高〉の肯定化につながった。〈足高〉に〈膝を曲げて〉蹴ることで「高足」の技を確立させ、単に「高く上げる鞠」以上の特別な技にした。

また、外郎家伝来の口伝を参考に「請け、高足、留め」を「一足三段」という一連の技術としたことで、「高足」の技の成功率を高めた。それには「一段三足」の〈低い鞠・高い鞠・低い鞠〉の考え方も基礎となった。「高足」の前後に調整用の足遣いである「請け」「留め」を挿入することで、「一段三足」の「手分の鞠」にあたる部分を「一足三段」として特立し、「高足」を確実に成就させることに成功した。結果、個人のパフォーマンス性の強い蹴鞠になる。「打緒」の一連化はそれにも関わる。

「一足三段」はメリハリも効いており、「下衆しき」地下鞠を見せるものにした。「数鞠」をするにしても、政光は「独り鞠」（『実又記』下8「地鞠」、旧稿①参照のこと）を披露するほどにパフォーマンス化した技を見せることになる。[注20]

そして「一足三段」は、江戸中期には、堂上鞠と地下鞠との違いを明確にすることになり、地下の鞠会の記録には「不落」の文字が

誇らしく残されるようになる。[注21]

『中撰実又記』関連の旧稿

①「日本体育史学会ワークショップ報告書・『中撰実又記』（一六四六）の蹴鞠技術と作法―技術編―」『体育史研究』第三三号、二〇一六年三月。体育史学会ＨＰで閲覧可能。

②「江戸初期蹴鞠書『中撰実又記』と能楽―地下外郎派口伝生成の背景についての覚書―」『古典演劇研究の対象と視点』（金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター）二〇一八年一月、一九～三二頁。

③「『中撰実又記』の諸本についての覚書」『金沢大学国語国文』四三号、二〇一八年三月。ＫＵＲＡで閲覧可能。

④「（研究方法セミナー）江戸初期蹴鞠書『中撰実又記』研究から地下外郎派蹴鞠復元へ向けて」『体育史研究』第三六号、二〇一九年三月。体育史学会ＨＰで閲覧可能。

⑤「外郎右近政光著『中撰実又記』概要」、「平野神社蔵難波家旧蔵蹴鞠文書本『中撰実又記』上下巻翻刻ならびに現代語訳」研究報告書『近世蹴鞠大衆化の構造―『中撰実又記』の世界―』研究代表・大久保英哲、二〇一九年三月所収。

注

（注1）「公家鞠」とは「平安～鎌倉時代の公家社会で確立した様式の蹴鞠」をいう学術語。桑山浩然・渡辺融『蹴鞠の研究―公家鞠の成立―』東京大学出版会、一九九四年、事項索引参照。公家鞠研究では同書が最大の成果である。

（注2）『古今中撰記』は不明。『実又記』に逸文が見られる。『実又記』の先行テキストとして、政光はこれを「師」と仰いでいる（『実又記』上序、下跋）。

（注3）『宗清百問答』については、（注1）前掲書、一四二～一四三頁、小川剛生『二条良基研究』笠間書院、二〇〇五年、二九九～三〇七頁、に詳しい。小川書によると説自体は宗清の父・宗緒のものという。

（注4）鴨沓が様式化するのは応仁の乱以後である。稲垣弘明『中世蹴鞠史の研究―鞠会を中心に―』思文閣出版、二〇〇八年、一七八～一八四頁参照。

（注5）渡辺融「蹴鞠の用語―わざを中心にして―」『体育史研究』一五号、一九九八年。

（注6）政光の同時代人であり、飛鳥井雅章の門弟であった灰屋紹益晩年の随筆『にぎはひ草』では、堂上鞠の立場に立って、「十分の沓下といふは、雅章卿にてましますらんとぞ覚へ侍るなり」と記す。

（注7）『続群書類従』所収の『九拾九箇条』にある「第八」「極意集」、「第九」「蹴鞠三流通抄」、「第十」（無題）といったものは、教久の伝であるか疑問があるとされる（『群書解題』参照）。「第十」に関しては、難波家旧蔵平野神社本『蹴鞠之抄　賀茂流』（整理番号一二―〇一（〇六四））や、『賀茂流蹴鞠記』（整理番号一二―〇四（〇六六））によると『極意集』と呼ばれる書である。天正十七年（一五八九）六月七日、松下元久による奥書があるので、「第八」「第十」に関しては、その頃の伝書かと思われる。「第九」については未検討であるが、沓に関わる記述が多く、他巻には見られない「地

鞠」「蹴手」などといった『実又記』と共通の語が出ていることから、内容的に他巻よりも『実又記』の頃に近くなっているように感じられる。なお、賀茂流蹴鞠書についてはほとんど研究がなされていない。

（注8）「形木」という概念については、兵法や能など他の芸能分野からの検討も必要であろう。

（注9）（注1）前掲書、事項索引参照。

（注10）拙著『遊戯から芸道へ―日本中世における芸能の変容―』玉川大学出版部、二〇〇二年、一〇七～一一二頁。

（注11）九二「延足の事」、九三「延足仕習様の事」、九四「連ね延べといふ事」、九五「重ね延べといふ事」、九六「突き延べといふ事」、九七「延べ帰りといふ事」、九八「帰り延べといふ事」、一〇一「半延べといふ事」。以上、七一～七二頁。

（注12）『内外三時抄』については、（注1）前掲書に翻刻と詳細な解説がある。

（注13）（注1）前掲書、事項索引参照。

（注14）『九十九箇条』では「高足」は序の段階で出現していた。他書でも「高く上げる鞠」は序で出現する。『実又記』では、序では「地鞠」を行う。なお、三家にも「地」はあるが、外郎家の概念とは違う。『実又記』では、「一足三段」には「蹴様の一足三段」と「拍子の一足三段」があり、後者は「序破急」のことであって、「御子左の家説」（下3「拍子の習」）であるとする。「拍子の一足三段」については、今は説明できないが、「一日の鞠会全体の進行」を序破急に分ける考え方以外に、『実又記』では「一セットのプレー進行」を序破急に分ける考え方が見られる（旧稿①）。「地鞠」に関することとともに今後の課題として考究していきたい。

（注15）（注1）前掲書、事項索引参照。

（注16）『蹴鞠口伝集』翻刻は、研究報告書『蹴鞠技術変遷の研究』代表・桑山浩然、一九九二年所収。『革匊要略集』翻刻は（注1）前掲書所収。

（注17）なお『松下十巻抄』三17「一段三足」（一五五頁）は、「三拍子」のことをいうようである。この項目に出る「蹴上」という語の語義規定にも関わり、問題が別なので本稿では扱わない。いずれ再考したい。

（注18）（注1）前掲書、事項索引参照。

（注19）（注1）前掲書、事項索引参照。

（注20）（注6）『にぎはひ草』では、賀茂家の「数鞠」をするさまを批判的に記している。

（注21）「渡辺融氏・近世蹴鞠研究講義　講義プリント」中「口頭発表レジメ5・7」、旧稿⑤研究報告書所収、四六頁、五四頁。

本稿で引用した本文は以下の各書に拠る。『地下流蹴鞠秘伝書』―宮内庁書陵部蔵本。『中撰実又記』―旧稿⑤。『宗清百問答』―平野神社蔵難波家旧蔵本。『蹴鞠百五十箇條』・『松下十巻抄』・『蹴鞠之目録九十九箇條』―『続群書類従』。『内外三時抄』―（注1）前掲『蹴鞠の研究』所収翻刻。『竹斎』―近世文学資料類従仮名草子編『竹斎物語集』（上）。『にぎはひ草』―『新燕石十種第二』。いずれも通読の便を計り、私意により、句読点を加え表記を改めてある。